

## 「重度の先天的障害のある野生チンパンジーの赤ん坊の発見」

### 【発表の概要】

タンザニアのマハレ山塊国立公園は、これまで50年近くの間、野生チンパンジーに関する研究が京都大学を中心とする研究チームによって継続されてきました。研究対象のチンパンジー集団（M 集団）については、チンパンジーの出生年や血縁関係、個体ごとの行動の特徴など詳細な情報が蓄積されてきました。今回、研究チームは、2011年にマハレのM 集団において重度の障害のある赤ん坊が生まれたことを発見し、その後赤ん坊が消失するまでの約2年間の行動を記録しました。

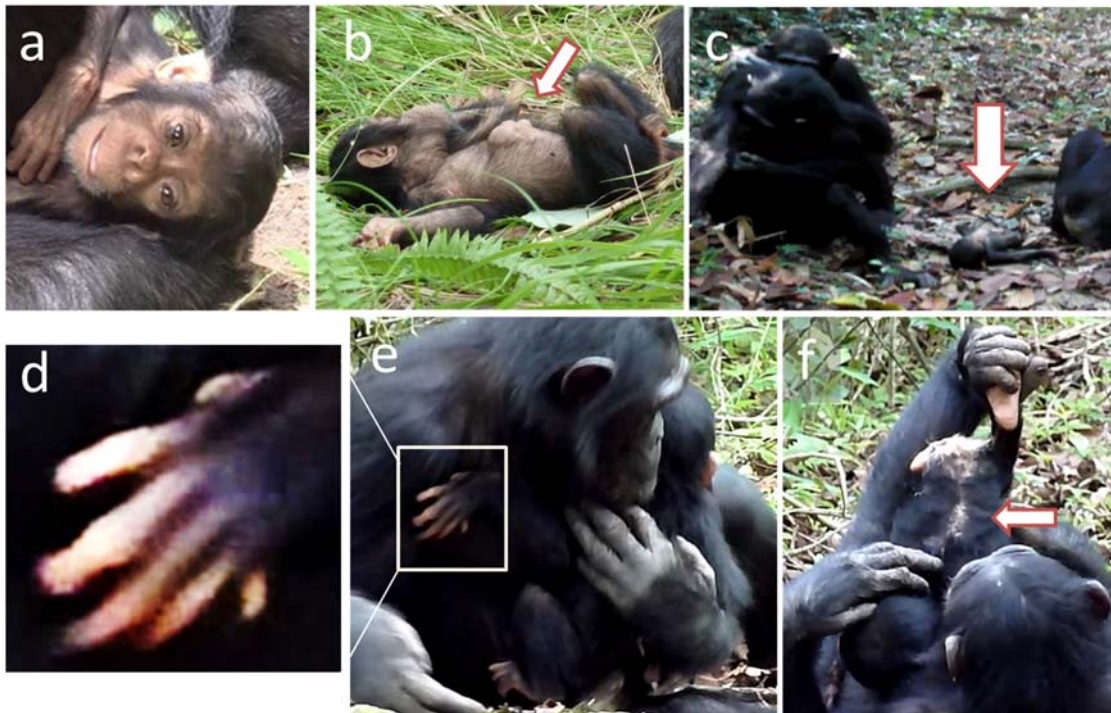
その結果、今回観察された障害児の特徴が、過去に報告されたダウン症様の個体の症例に酷似していることがわかりました。野生下でダウン症様の赤ん坊が発見され、しかも2年近く生き残った事例が報告されるのは今回が初めてです。また、他個体からのケアとして、他個体がその赤ん坊に対して恐れや攻撃といった特異な反応を示さなかったこと、母親が過去の子育てとは異なる方法（腹に掴まった赤ん坊に片手を添えつつ移動するなど）で障害児を育てていたこと、障害児の姉が母親の代わりによく世話をしており、その姉が自身の子を出産した約1ヵ月後に障害児が消失したことがわかりました。重度の障害のある赤ん坊が野生下で2年近く生き残ることができた要因として、母親による柔軟な子育てや姉の世話といった他個体からのケアが影響を与えていた可能性があります。

一方、これまで母親は、自分の子を非血縁者に比較的によく預ける傾向がありましたが、今回の事例の障害児を血縁者（障害児にとって姉と兄）以外に預けることはありませんでした。人類進化の過程において障害者が他個体からどのようなケアを受けていたかについて、これまで化石など考古学的な証拠から議論されており、その中で、過去のヒト社会において、身体障害のある個体が同じコミュニティのメンバー（非血縁者を含む）からケアを受けることによって生き残ることができた、とする見解があります。今回の事例を基に考えると、ヒトの進化の過程で、障害者のケアが血縁者のみによるものから非血縁者によるものへと拡張された可能性があります。ヒトとチンパンジーの共通祖先において障害者がどのようなケアを受けていたかをより詳細に明らかにするためには、今後もチンパンジーの野外調査を継続し、今回のような野生チンパンジーにおける障害者へのケアに関する情報を蓄積していくことが重要です。

タンザニアのマハレ山塊国立公園は、故・西田利貞氏（京都大学名誉教授）が野生チンパンジーの調査を開始した1965年から数えて今年で50周年を迎えます。今回のような重度の障害のある赤ん坊に関する事例は、他のチンパンジーの野外調査地においてもこれまで例がなく、50年の長期調査によって初めて観察可能になったと言えるでしょう。

この成果は、国際学術誌『Primates』誌に近日中にオンライン公開される予定です。

## 障害児の諸特徴



- (a) 口が半開きであることが多い (9月齢時)
- (b) お腹に腫瘍がある (11月齢時)
- (c) 母親の毛づくろい時、地面に置かれる (6月齢時)
- (d) 左手に6本指がある (浮遊型の多指症) (10月齢時)
- (e) 姉から世話を受ける (10月齢時)
- (f) 背中の中毛が一部禿げている (10月齢時)